



川崎歴史ガイド

夢見ヶ崎と 鹿島田



夢見ヶ崎と鹿島田



ポツカリ浮んだように見える夢見ヶ崎

標高三〇メートル余。台形状の独立した丘がJR鹿島田駅の南西方向に望まれます。

この丘は、神奈川県北東部と東京都八王子、町田方面に広がる多摩丘陵の離れ丘陵で、地元では加瀬山と呼ばれています。ここは古くから江戸湾を一望できる景勝の地として知られていました。江戸時代、大田南畝(蜀山人)が多摩川の堤防調査の役目でこのあたりを訪ねたとき、その景観のよさを文化六(1806)年の「調布日記」に記しています。「此処よりみる所、南は金川(神奈川)の海、東は品川の海、空もひとつに見わたされて、帆かけ舟のみゆるなど絵にもかまほし、むかふにむらしげる森は池上の本門寺なり」。

今日、この山は市民から別名「夢見ヶ崎」の名で親しまれています。その名の由来は、ここに築城を計画した太田道灌がある夜、自分の兜を驚(おど)ろしに持ち去られたという縁起のよくない夢を見たので、築城をあきらめたという故事にちなんでいます。

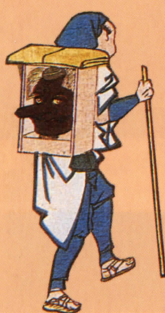
加瀬山はまた古墳の多い山としても有名です。昭和45年の墳丘調査では、五〜八世紀の円墳が九基確認されました。この古墳群が注目を受けたのは、昭和12年、丘の西端に位置する白山古墳の後円部における三角縁神獣鏡と昭和17年、白山古墳の周辺部における秋草文壺の出土にありました。中でも、平安末期の作品とされる火葬骨蔵器「秋草文壺」は、川崎市内の文化財としては唯一の国宝で、当地が関東の要所であったことをうかがわせる有力な資料のひとつです。しかし大正時代以降、この丘も川崎市に進出してきた大手企業の工場用地や住宅地の盛土に使ったため度々削られ、南加瀬貝塚や白山古墳など消滅してし

まった遺跡も少なくありません。現在、丘の上には、熊野神社、了源寺などの神社仏閣の他、市立の動物公園や展望台、戦没者の慰霊塔があり、市民の憩いの場となっています。

加瀬山の麓に広がる小倉を始め、鹿島田、下平間、塚越などのJR鹿島田駅周辺は、良質な「稲毛米」の産地として知られた小杉や登戸などと並んで稲毛・川崎領の米作地としても有名でした。このことを裏付けるように、米に係わる地名が小倉(米を蓄えておく倉のあった所)、鹿島田(鹿島神社に寄進した水田)などに認められます。

ところで、これらの地域を大きく変えたのが、昭和2年南武鉄道(現在のJR南武線)の開通と、昭和4年8月に完成した鉄道省新鶴見操車場の開設でした。これによって小倉や鹿島田の多数の神社、住宅が移動し、沿線には多くの工場地が開発されたのです。この操車場は昭和59年に廃止され、機能転換されるまで、東日本で最大の操車場として東海道線の通過貨物や工業地帯の貨物の輸送に貢献してきました。

戦後、工場地を囲む形で住宅地も増加し、さらに昭和40年以降、公害が次第に社会問題化するにつれ、工場立地規制の影響もあって工場の郊外移転が見られるようになりました。南武線と横須賀線にはさまれた工場跡地には、業務・住居機能を備えた高層建築群が完成し、景観を一変させました。

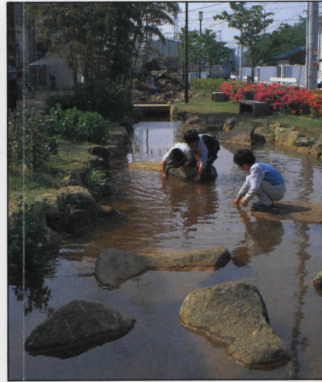


大師堀

二ヶ領用水の建設は、徳川家康の命を受けた代官小泉次大夫によって始められ、慶長一六（1611）年の完成までに実に一四年の歳月を要する大工事でした。多摩川の水を中野島、宿河原両取入れ口から取り込んだ用水は、JR久地駅近くで合流し、久地の分量樋（筒分水）に導かれていました。ここで四つの堀に分けられていたのです。最も多量の水が流れていた川崎堀がいわば二ヶ領用水の本流で、この本流からさらに細かい堀に分れていました。上小田中から分れる井田堀、宮内から

の木月堀、市の坪からの上平間堀などです。そしてここ鹿島田付近で大師河原、渡田方面までの水田を灌漑する大師堀（大師河原用水）と鶴見川北岸一帯を潤す町田堀に分れます。また大師堀は昭和14、49年まで工業用水としても利用されました。近年、土地利用の変化と水質の悪化によって、埋立てられる所もでてきました。昭和63年、このあたり的大師堀は環境整備事業の一環として親水化され、市民に親しまれています。

子供が遊ぶ現在の大師堀



成川家文書に描かれた大師堀



わが国最初の工業用水

川崎市の臨海地区が工場地帯として形をなし始めたのは、昭和5年の頃。当時、工業用水は各工場ごとに井戸を掘り、水を汲み上げるという状態でした。このため、昭和11年に神奈川県議会において地下水の枯渇が懸念され、地下水取締り規則の整備と工業用水の確保が急がれたのです。

一方、いくつかの大工場も新たな水源を求めて調査を進めたものの満足はいく結果は得られませんでした。こうした事情を背景に、大手工場と川崎市との話し合いが進み、工場側が工事費

の四分の三を負担することで市営工業用水道を建設することになったのです。完成したのは昭和14年。当初、大師堀から一日に二万七千トン、北加瀬、鹿島田の鑿井一五カ所から五万四千トン、計八万一千トン（後に増量）の取水を行ない平間浄水場をへて臨海部の工場地帯に供給されました。

昭和49年、平間浄水場は二ヶ領用水からの取水を停止しましたが、地下水や上水道からの補てんを水源として、今日も生田、長沢両浄水場とともに市内に工業用水を供給しています。

川崎市中央部の水田



相模川から長沢浄水場に取った水の一部が工業用水となる



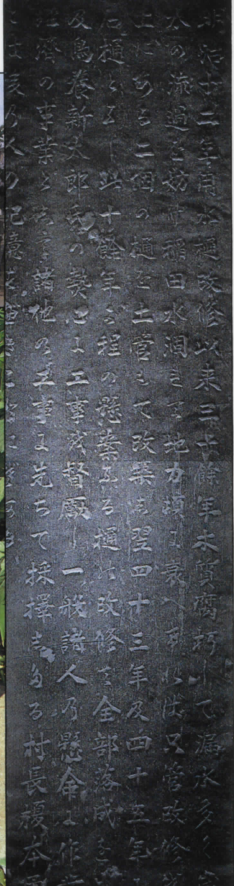
平間浄水場夕景



称名寺と赤穂浪士の隠れ家

下平間小学校の近くにある称名寺は、赤穂浪士とかかわりの深い寺で、門の前には「赤穂義士旧跡」の石碑が建っています。当時の門前には、このあたりの大地主で赤穂浅野家と吉良家上屋敷に出入りしていた軽部五兵衛が住んでいました。彼は赤穂びいきで吉良邸の情報を浅野家に伝えていたそうです。そんな縁で、仇討ちの前、四十七士の一人である富森助右衛門が付近に住んでいました。やがて大石内蔵助も討ち入りのため江戸に向かう途中、十日ほど助右衛門宅に滞在していたという

話が残っています。こうしたことから境内の鐘楼のそばに内蔵助の座右の銘とされている山鹿素行の歌碑が建っています。「幾秋も 光変わらず 澄む月は 曇らぬ世々の 為しとぞ知る 素行」そのほか、称名寺には、川崎市重要文化財である「紙本着色・四十七士像」の他、内蔵助、大高源吾、堀部安兵衛らの書画や赤穂浪士が使用したという銚子、木盃、能面などが保存されています。



境内の樋誌

御嶽神社



円墳から出土した板碑

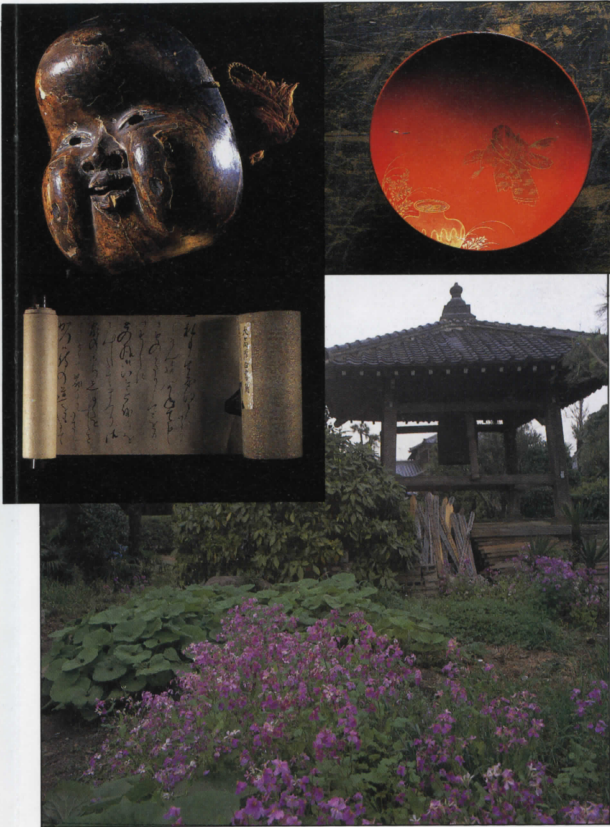
JR南武線の鹿島田・矢向駅間に広がる塚越の名は、「新編武蔵風土記稿」に『村内に古塚ありて其邊を塚の越といへり』とあるように、塚越二丁目に今も残る円墳に由来しています。現在のこの「塚」の規模は高さ三・二メートル、直径約一七メートルです。古くからこの円墳をいじると、家族に若死に出るといふ言い伝えがありました。しかし、近くの御嶽神社創建にあたって、この古墳の南西側の墳麓が盛土に利用されたといわれています。その時、刀剣も出土し、御嶽神社の宝物殿

御嶽神社と塚越

に保存されていましたが、その後、刀剣は盗難にあい紛失、宝物殿は第二次大戦の空襲で焼失しました。

この円墳から後世の人が埋葬したのと思われる板碑が出土しています。高さ七二センチ、幅二二センチのこの板碑は、花と花瓶が対になった花瓶単二茎と呼ばれる図案が刻まれています。その様式からすると、南北朝時代のものだと考えられています。

また、境内には、このあたりの木製の用水樋を明治末に土や石の管に改修した際の樋誌（石碑）がみられます。



内蔵助(能面、木盃)や源吾(書簡)ゆかりの遺品と境内



東明寺門前の案内

東明寺と酒づくりの絵馬

もとは、東京・芝にある大本山増上寺の末寺。天正一七（1589）年、浄円がここに住み、里人からは俗に浄円坊とも呼ばれていました。のちに増上寺の貞運が止住。現在の寺号は、慶長一八（1613）年、徳川家康が鷹狩りのため小杉の西明寺に泊まった際、給仕にあたった貞運が家康から身分を問われ、東にある小庵の主と答えたところから西明寺に対し「東明寺」と名づけられたという事に由来しています。現在は、「塚越の灸」といわれる灸治療がとくに有名で、毎月三・八のつく日には

遠くから人々が訪れています。ここには、江戸末期の作といわれる当時の酒造りの様子を描写した絵馬（神社・寺院に奉納する馬に由来。次第に馬以外の絵も描かれるようになったもの）が残っています。絵馬には、その頃、塚越村の造り酒屋だった新開屋六右衛門ほか、杜氏（酒づくりの職人の長）や麴出しなどの名が読み取れます。江戸時代における酒造りの様子をうかがい知る上で貴重な資料です。

酒造りの様子が描かれた絵馬



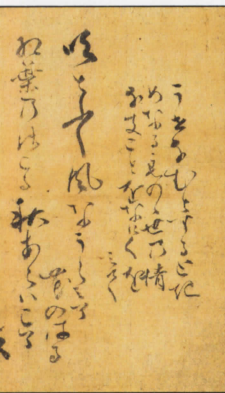
古川の石井家と長屋門

古川小学校の近く、かつて二ヶ領用水が流れていた道路に沿って長屋門のみえる石井家があります。深い灰色の瓦ぶき、上半分が漆喰の白壁、下半分が板壁の長屋門は両袖型といわれ、文政三（1820）年に再建されたものです。長屋門とは、武家屋敷などの前面に家臣・下男などを住ませるための長屋を設け、その一部をあけて門としたものですが、ここの長屋門では、正面から見て左側に人が住み、右側に年貢米が収められていました。また、古川は地形的な影響から多摩川の洪水にたび

たびあい、石井家にはかつて洪水時に利用した舟が昭和20年代まで残っていたそうです。当家の相伝によると天正一八（1590）年、豊臣秀吉の攻撃を受け、小田原評定で自害した北条氏政を祖先とし、江戸時代には名主をつとめた家柄だそうです。現在石井家には、「吹くとふく 風ならみそ花の春 紅葉ののこる 秋あらばこそ」という氏政の辞世の句といくつかの氏政とかかわりのある遺品が残っています。



石井家に伝わる化粧箱



氏政の書



内側から見た石井家の長屋門



浄水場内に築造中の配水池

市内最初の近代水道

現在の幸文化センターの場所には、かつて、飲料水に恵まれなかった川崎町の水事情を一変させた市内最初の近代水道施設である戸手浄水場がありました。完成が大正10年。市内でも水質のよい宮内から取り入れた多摩川の水を約七キロメートルの導水管で戸手へ導きました。当時の計画給水人口は四万人、一日最大給水量は三三三〇立方メートルでした。

その後急激な都市化に伴う水需要の増加に対して、昭和13年に菅から取り込んだ多摩川の伏流水を扱う生田浄水

場が通水。昭和29年には、相模湖方面から長いトンネルで導水する長沢浄水場が完成し、東京・世田谷方面にも分水されました。そのような市内の給水施設の拡張を背景に、昭和43年に戸手浄水場はその役割を終えました。

市内ではさらに昭和45年に潮見台浄水場の新設をみ、49年には小田原方面の酒匂川から川崎市への導水も始まりました。なお、昭和55年7月、戸手浄水場跡地にあたる幸文化センター前には、当時をしのぶ「川崎市水道発祥之碑」が建てられました。

木製水道管も使われた。鉄線で巻かれ、内側はさざくれている。



鹿島田と鹿島大神

JR横須賀線の新川崎駅からほど近いところに「鹿島さま」の名で親しまれている鹿島大神があります。もとは新鶴見操車場の中央にあたる場所にありますでしたが、昭和元年に現在地に移転してきました。

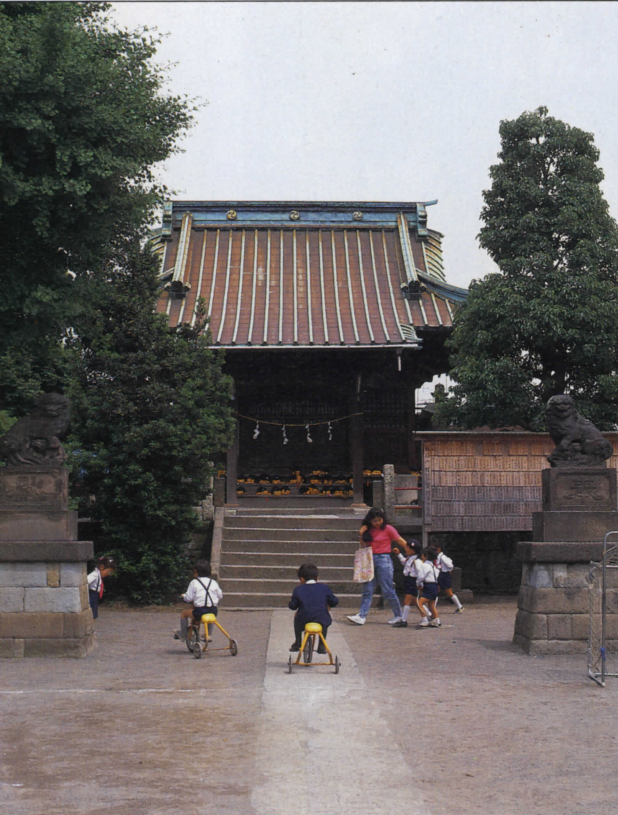
地元の言い伝えによると、本神社は鎌倉時代、現在の鹿島田あたりに開墾に入った人々が、今日、関東地方で広く知れ渡った鹿島神宮から勧請（神の分霊を移し祭ること）して創建されたと伝えられています。やがて開墾が進み、水田ができあがるとこれを村の鎮

守鹿島大神に寄進したそうです。のちに鹿島の水田；、こうしていつのまにか「鹿島田」という地名が生れたといわれています。

この土地はその後、鎌倉の鶴岡八幡宮に寄進され、鹿島田郷として同宮文書や円覚寺文書を名をとめています。



鹿島大神の境内





かつてトマトソースを作っていたころの小沢家

今日、チキンライスやオムライスにはトマトケチャップ・ソースが欠かせませんが、明治初期から小倉一帯では、後にその原料となる「あか茄子」と呼ばれたトマトの栽培が盛んに行われていました。栽培方法は、わらと米糠を重ねた苗床の上に油障子を覆い、夜には筵を被せるという、今日のビニール栽培と同じことを行っていました。

大正7年、これに着目した地元の小峰氏と小沢氏は、これを原料とするトマトソース工場をそれぞれ自宅内につくりました。

小倉のトマトケチャップ工場

当時、トマトソースはハイカラな商品で、庶民には縁遠く、販売先も東京の洋食屋へ牛車で売り歩いたということとです。その後、ヤマコ（小沢宅の屋号・無量院近く）の製品は味が良く、変色しないので評判を呼び、最盛期には年間二十万本を生産しました。そのほとんどは、末吉橋から水路、横須賀の海軍施設に納品されたそうです。

しかし、昭和10年代に入ると戦時色が強くなり、トマト栽培も規制され、衰退の一途をたどり、昭和23年を境に工場は閉鎖しました。

トマトソースのレトルト(右上)、 トマトは現在も市内で生産されている。



上=工場跡地に建てられた高層建築群 下=線路敷の一部

新鶴見操車場

大正初期から京浜地域を中心とする物資の輸送量は工場の本格的発展と急速な都市化によって増加してきました。これに対応して鉄道省（大正9年〜昭和18年）は、京浜間に大操車場の建設計画を進め、大正14年、現在の鹿島田・小倉付近の約八十ヘクタールの土地に建設する計画を決定、新鶴見操車場は昭和4年に完成しました。

この操車場の完成により、全国各地から来た貨車を工場別につなぎなおして送り出したり、工場でできた製品を全国に送り出す中継輸送は画期的に改

善されました。この操車場は市内臨海工場地帯が発展していく上で計り知れない役割を果たしたのです。一方、鹿島田、小倉両集落では、工事に際して神社や多数の住宅が移転を余儀なくされ、また川崎市市の市街地の西部への発展や市内西北部への交通連絡の整備に支障をきたすという側面もありました。

昭和54年東海道の貨物別線の開通、昭和55年の新川崎駅の開設、そして昭和59年ダイヤ改正による仕分け線機能の停止に伴い、信号場、機関区のみを残し、操車場は廃止となりました。

無量院と小倉池の伝説

無量院の北西には、今日の小倉緑道に沿って昭和30年頃まで広さ約九ヘクタールの細長い帯状を呈する小倉池がありました。

昔、正月14日、小倉池の縁に生える柳の枝を切ってきて、繭型の団子、繭玉をさし、大黒柱に飾る風習がありました。この柳の枝を切り損ねて落とした鉦かねを拾おうとして池に落ちてしまったおじいさんの伝説があります。当人の法事の最中、龍宮から元気に帰ってきたのですが、約束を破って玉手箱を開けたために死んでしまいます。中に



小倉の近くを流れる鶴見川

夢見ヶ崎の麓に広がる小倉は、稲毛・川崎領の穀倉地帯の一部として知られていました。しかし小倉付近は、近くに鶴見川が流れているにもかかわらず、その河床が低いため直接水田に水を引くことができませんでした。そのため、古くは小倉池などのため池の水に依存した地域でしたが、享保年間（1716～89年）、二ヶ領用水と小倉池を結ぶ小倉用水が開発され、米の収穫量を伸ばしたのです。その一方で、この地域は江戸時代初期から鶴見川の洪水をめぐって苦勞も多かったようです。

小倉用水の面影を残す緑道



小倉用水の記念碑

小倉用水

用水の水門は、6月20日ごろ閉めて9月14日ごろ開けられるまで、水量を調節する大切な役目を果たしました。

また集落には「町堀」とか「村堀」と呼ばれる水路も網の目のように作られ、日常生活にとっても大切な用水でしたが、昭和30年ごろからの急激な都市化に伴って段階的に埋立てられてしまいました。



入っていた小さな観音さまと龍の鱗は、無量院のそれぞれ、ご本尊の胎内と常明燈に納められたそうです。現在、これにちなむ龍燈観音があり、午の年（十二年毎）に御開帳があります。また、無量院の本堂脇にある石灯籠は、六地藏信仰と庚申信仰を兼ねたたいへん珍しいものです。寛文元（1661）年に造られ、庚申塔としては市内最古のもので、市の指定文化財となっています。

左上＝無量院の石仏 右上＝石灯籠 下＝無量院の夕暮れ



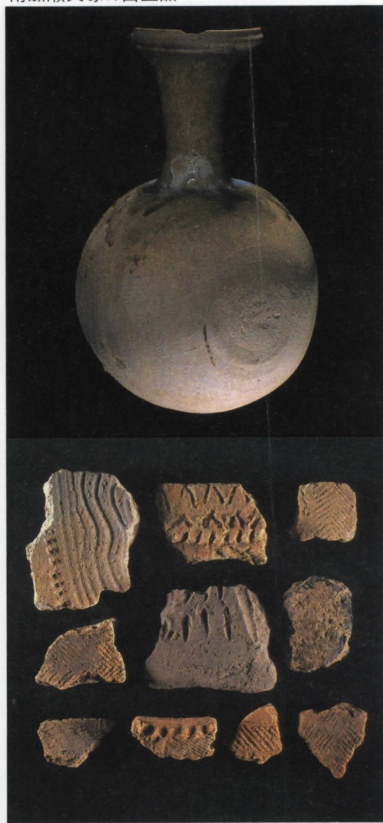
南加瀬貝塚

現在の幸区日吉出張所から新鶴見グランドにかけて、市内有数の規模をもつ貝塚がありました。

明治39年、考古学者の八木斐二郎(当時帝国大学理科大学、現東京大学理学部)によるこの貝塚の本格的な調査が行われました。それによって、関東地方でも稀な弥生時代の貝塚であることがわかりました。

また、この貝塚の弥生時代の地層から出土した土器は、わが国における縄文時代と弥生時代を区別する最初の標識土器としても有名になったそうです。

南加瀬貝塚の出土品



しかし、明治末期、現在のJR川崎駅付近に進出してきた横浜製糖(のち

の明治製糖)や東京電気(現東芝)などの大規模工場の埋立て用にこの土砂が使われたり、建物が建てられたりしたため、貝塚の遺跡はほとんど認められなくなりました。

新鶴見グランドから見た南加瀬貝塚跡



円墳だと考えられる4号墳(左上)と横穴式石室が主体の3号墳

夢見ヶ崎古墳群

加瀬山台地一帯は、今日、夢見ヶ崎動物公園として、市民の憩いの場になっていますが、ここはまた、関東地方でも有数の古墳群があることで有名です。これらの公園内の古墳群は夢見ヶ崎古墳群と呼ばれ、ほぼ東西方向に一〜九号墳が分布しています。

その中でも有名なのが、台地の南側斜面に築かれた第三号墳です。この古墳は南面に入口を有する横穴式石室を主体としています。築造は七〜八世紀頃(ほぼ奈良時代)と推定され、大陸からの渡来人系の墓であったとの見方

もあります。この第三号墳は、昭和26年に発掘され、鉄釘、麻織断片、成人男子骨片が出土しています。古墳内部の横穴式石室墓は、調査後、内部を補強して外から見られるようになっていきます。

また、了源寺境内にある四号墳は、墳丘が老木に覆われてはつきりしませんが、明治末年に獸身鏡二面と鉄斧が出土し、それによると五世紀後半築造の円墳だと考えられています。



了源寺門前の桜

了源寺と軽部五兵衛の墓

夢見ヶ崎公園内にある了源寺は、寛永年間（1624～25年）の創建で、本堂および庫裏は宝暦年間（1761～62年）に建てられ、改修を加えたものが現存しています。この地には、江戸時代の狂歌・洒落本の作者としても有名な大田南畝（蜀山人）も訪れ、当時の様子を文化六（1806）年、『向岡閑話』に記しています。三月十七日到三頂竜山了源寺一（中略）七曲といへど、五曲ばかり山に上るなり。夢見が崎も今は麦畑とす。（略）

了源寺には、忠臣蔵で名高い大石内

蔵助らの赤穂浪士が吉良邸へ討ち入り前に身を潜めていたという、軽部家の主、軽部五兵衛の墓があります。五兵衛は下平間の地主で、江戸の浅野家や吉良家に肥料となる下肥の清掃などを請負い、出入りをしていました。彼は赤穂浅野家びいきで、秘かに吉良邸の情報を浅野家に知らせていたので、吉良邸討ち入りには尊軍な足がかりになつたといわれます。現在、門前の墓地の入口には「赤穂浪士の隠れ家軽部五兵衛の墓あり」という石標がたつています。

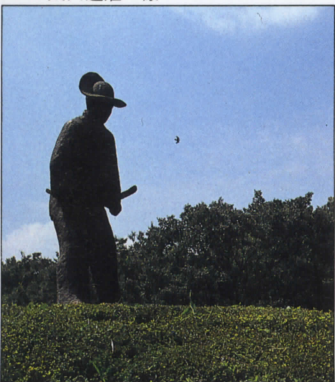
10月24日に行われ、約20カ寺の万灯が集まる了源寺のお会式



夢見ヶ崎と太田道灌

夢見ヶ崎公園に高くそびえる慰霊塔の方に歩むと左側に第九号墳が見えます。古墳山頂には、「夢見ヶ崎史蹟」という石碑と小さな祠があります。長祿三年（1577）年に江戸城を築いたことと知られる太田道灌は、多摩丘陵の東端に位置する加瀬山に築城を考えました。ところが、ある夜、飛来した鷲が道灌の兜を奪って駒岡村（横浜市鶴見区内）のほうへ飛び去った夢を見たので、不吉であるとして築城を断念したといえます。夢見ヶ崎という地名は、この縁起によるものと伝えられています。

太田道灌の像



地名のつく菓子



家族連れてにぎわう動物公園





寿福寺の地獄絵



大亀石

水子地藏

白山古墳跡

はくさん

加瀬山西部に連なるところに、開発によってほぼ消滅してしまいました。墳頂に白山神社があったことから白山古墳と名づけられた市内最大の前方後円墳がありました。全長八七メートル。昭和12年に慶応大学によって行われた古墳調査において、後円部中央に木の棺を置き、まわりを木炭で囲んだ木炭柳の部分から三角縁神獸鏡、小形内行花文鏡、刀身など多数の副葬品が発見されました。中でも三角縁神獸鏡（慶応大学所蔵）は京都府大塚山古墳、山口県古墳出土の三角縁神獸鏡と同

じ鑄型いいたがを使ってつくられた鏡で、大和朝廷と白山古墳築造者との結びつきを示すものとして注目されています。

ところで関東地方に古墳が築造され始めたのは、四〜五世紀頃と考えられています。白山古墳の築造もこの頃で、周辺には、矢上川を挟んで相対するように観音松古墳（横浜市港北区）、多摩川の対岸には宝来山古墳や亀甲山古墳（ともに東京都大田区）が築かれています。いずれも大型の前方後円墳で、造営者の権力の大きさを物語っています。

上=三角縁神獸鏡 下=亀甲山古墳



寿福寺と力石

ちから

浄土宗の寿福寺には、江戸末期から大正初期にかけて南加瀬村の若者たちの力くらべをした時に使ったという力石が残っています。

力石の多くは卵形ですが、ここの力石は亀の甲のような形をしており、大きさは市内でも最大級のもので、庶民階級の力自慢の若者にとって、祭りなどの際に行った力くらべはハレの場で自分の力を示す格好の機会でした。力くらべは、のちに棟上げ式の際にやぐらの上で米俵を持ち上げるような曲持ちへと変化していきました。

現在、当寺に残る力石には、南加瀬有数の力持ちだった新堀平次郎の碑文が刻まれています。「嘉永五 壬子弥生 中旬 持之」。その裏には、のちに住職になって「当山の檀徒に新堀平次郎あり 橋樹郡南加瀬宇越路に生る 若くして非凡の大力あり 近隣の有志と計り興行に及び 大嶺を自由自在に動かし 観客を驚かす 当時郷土の人 稲毛の力持平次郎と呼ぶ 明治14年4月6日安然として瞑す」と記されました。

◎参考文献

- 川崎市史 資料編1 考古・文献・美術工芸●川崎市■同・昭和63年
 川崎市史●川崎市■同・昭和43年
 川崎誌考●山田蔵太郎■国書刊行会・昭和57年
 川崎史話(合本)●小塚光治■多摩史談会・昭和63年
 閑話雑誌●川崎市■島崎文教堂・昭和53年
 わが町の歴史川崎●村上直■文一総合出版・昭和56年
 かわさき散歩●川崎市総合文化団体連絡会■昭和55年
 赤穂浪士と川崎(歴史公論第6巻12号)●村上直■雄山閣・昭和55年
 史跡名称 夢見ヶ崎●高橋東舟■道灌会・昭和13年
 新編武蔵風土記稿(第3巻)●雄山閣・昭和45年
 新版 神奈川県の歴史散歩(上)●神奈川県高等学校教科研究
 研究会社会科歴史分科会■山川出版社・昭和62年
 南武線歴史散歩●中村吾郎■鷹書房・昭和63年
 頂龍山了源寺誌●了源寺・昭和38年
 川崎 幸区地誌●幸区地誌刊行会■有隣堂・平成元年



●川崎歴史ガイドのシンボル・マーク

このシンボル・マークは、古代の鏡を現わしています。歴史は私たちの祖先がつくりだしたのですが、それを再び映しだすのが、川崎歴史ガイド計画です。シンボル・マークは、歴史を甦らせ、映しだす鏡です。ガイド用の「柱」の上に、それが必ずついています。 デザイン=粟津 潔

ガイドパネルデザイン=粟津 潔+清水まこと

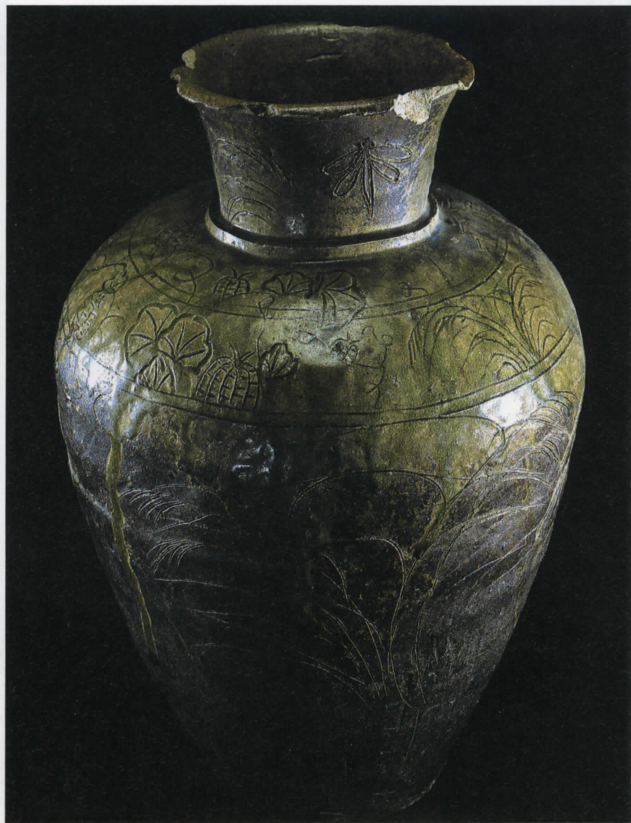
Design=川村 易 Photo=小池 汪

公益財団法人 川崎市文化財団

〒210-0007 川崎市川崎区駅前本町12-1タワーパーク3階

☎044-222-8821 FAX044-222-8817 頒価100円

印刷=大日本印刷株式会社 無断転載を禁ず 平成2年2月発行



オリーブ色の自然釉が豪快に流れている

国宝・秋草文壺

加瀬山の西麓から昭和17年、火葬骨を納める骨壺が発見されました。高さ四二センチ、口径一六センチのその壺は力感に溢れたもので、素地は灰色の荒土、表面は赤黒く焦っています。ちょうど肩のあたりからオリーブ色の自然釉が厚くかかり、胴に流れています。この壺の印象を強くしているのは表面に力強く伸びやかに彫り付けられた文様にあります。首の部分には、トンボやすすき、からすうり、柳などが描かれています。「秋草文壺」という名はこれらの文様に由来しています。なお、口の内側には「上」の文字が彫

りこまれています。

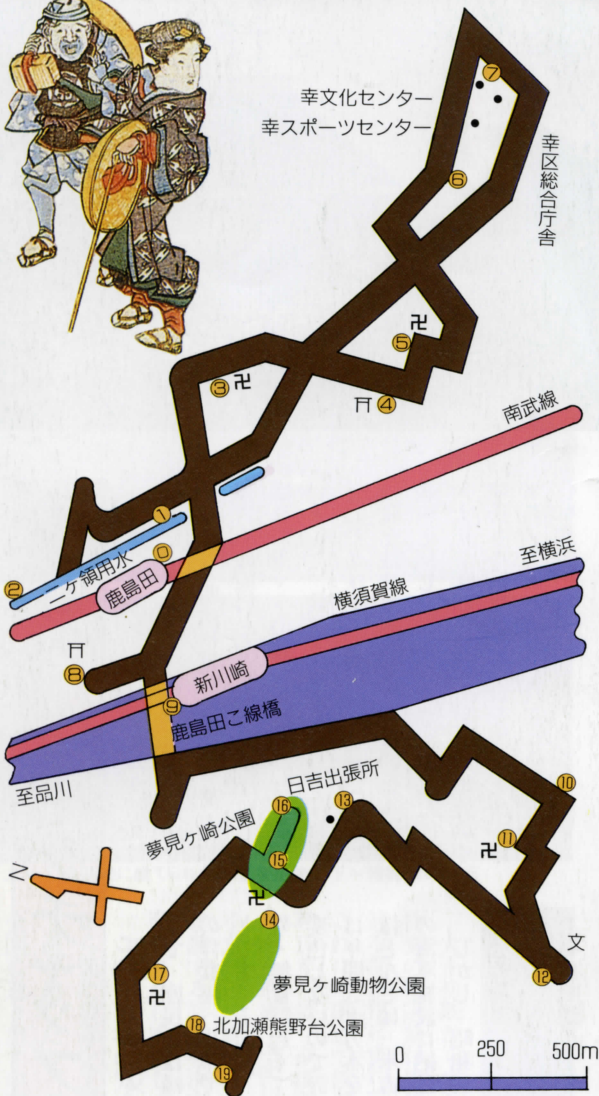
平安時代の末期、十二世紀頃の製作であろうと推定され、また壺の形や作風から、現在の愛知県常滑地方や渥美地方でつくられたのではないかと考えられています。いずれにせよ、わが国における陶磁器史上最高峰に位置する重要な遺品とされ、国宝に指定されています。現在この壺は、東京国立博物館に寄託されています。





幸文化センター
幸スポーツセンター

幸区総合庁舎



- | | | |
|---|--------------|--------------|
| ① | 総合案内板 | JR鹿島田駅前 |
| ② | わが国最初の工業用水 | 幸区下平間 |
| ③ | 称名寺と赤穂浪士の隠れ家 | 幸区鹿島田 |
| ④ | 御嶽神社と塚越 | 幸区下平間 |
| ⑤ | 東明寺と酒造りの絵馬 | 幸区塚越1丁目 |
| ⑥ | 古川の石井家と長屋門 | 幸区塚越2丁目 |
| ⑦ | 市内最初の近代水道 | 幸区古川 |
| ⑧ | 鹿島田と鹿島大神 | 幸区戸手本町1丁目 |
| ⑨ | 新鶴見操車場 | 幸区鹿島田 |
| ⑩ | 小倉のトマトソース工場 | JR新川崎駅前 |
| ⑪ | 無量院と小倉池の伝説 | 幸区小倉 |
| ⑫ | 小倉用水 | 幸区小倉 |
| ⑬ | 南加瀬貝塚 | 小倉小学校正門付近 |
| ⑭ | 夢見ヶ崎古墳群 | 幸区北加瀬・南加瀬境 |
| ⑮ | 了源寺と五兵衛の墓 | 幸区北加瀬 |
| ⑯ | 夢見ヶ崎と太田道灌 | 幸区北加瀬 |
| ⑰ | 寿福寺と力石 | 幸区北加瀬 |
| ⑱ | 白山古墳跡 | 幸区北加瀬熊野台公園入口 |
| ⑲ | 秋草文壺 | 幸区南加瀬 |
- (3、10、14、19の現地に当財団のガイドパネルはたっていません)

夢見ヶ崎と鹿島田ルート



Aパネル①総合案内板



Bパネル②大師堀



Cパネル⑩夢見ヶ崎と太田道灌

川崎歴史ガイドパネル所在地

- | | |
|-------------------|---------------|
| ① 夢見ヶ崎と鹿島田ルート総合案内 | ⑪ 小倉のトマトソース工場 |
| ② 大師堀 | ⑫ 無量院と小倉池の伝説 |
| ③ わが国最初の工業用水 | ⑬ 小倉用水 |
| ④ 称名寺と赤穂浪士の隠れ家 | ⑭ 南加瀬貝塚 |
| ⑤ 御嶽神社と塚越 | ⑮ 夢見ヶ崎古墳群 |
| ⑥ 東明寺と酒造りの絵馬 | ⑯ 了源寺と五兵衛の墓 |
| ⑦ 古川の石井家と長屋門 | ⑰ 夢見ヶ崎と太田道灌 |
| ⑧ 市内最初の近代水道 | ⑱ 寿福寺とカ石 |
| ⑨ 鹿島田と鹿島大神 | ⑲ 白山古墳跡 |
| ⑩ 新鶴見操車場 | ⑳ 秋草文壺 |

(4、11、15、20の現地に当財団のガイドパネルはたっていません)